

三谷邦明著『源氏物語の言説』

安藤 徹

『物語文学の方法Ⅰ・Ⅱ』『物語文学の言説』に続く三谷邦明の〈異議申し立ての物語学〉の書として刊行された『源氏物語の言説』（以下、「本書」）は、その書名に連うことなく、『源氏物語』の言説分析を真摯かつ洞察力豊かに実践しながらその可能性を探る。労作にして大著、今後の研究の指針となるべきへ重たい『源氏物語』論の登場である。

本書の「言説分析」とは、〈示すこと〉に対して劣位にある〈語ること〉を意識化し、「表層の言葉が隠蔽していた、深層に潜在していたものを露呈」（九頁）させ、「テキストにさまざまな混沌を与える」（二七五頁）ための「方法的訓練」（三三五頁）を言う。なお、ここの「言説」は、バンヴェニスト流あるいはバフチン流の「ディスクール」概念に通底し、さらには時枝誠記の「文章」研究の展開として定位されている（二五―六頁）。それらに共通する表現〈主体〉へのまなざしこそが「言説分析」の大きな特徴である。具体的には、言説を（a）地の文、（b）（1）会話文の直接言説、（b）（2）会話文の間接言説、（c）（1）内話文の直接言説、（c）（2）内話文の間接言説、（d）草子地、（e）自由直接言説、（f）自由間接言説、に区分するところに要点がある。

本書は二部構成をとり、計十三編の論文（他に第十二章に付論あり）を収録する。「第一部 源氏物語の言説分析」は、第一章「語り」と〈言説〉（副題略、以下同）、第二章「光源氏という実存」、第三章「呪われた実存」、第四章「誤説と隠蔽の構図」、第五章「言説分析への架橋」、第六章「篝火巻の言説分析」、第七章「山里」空間・境界空間からの眼差し、第八章「御法巻の言説分析」、第九章「囚われた「思想」」、第十章「言説区分」、第十一章「自由直接言説と意識の流れ」（目次では「意識の流れ」ではなく「内的独白」とあり、興味深い誤りだ）、第十二章「夢浮橋巻の言説分析」、の十二編の論文よりなる。いずれも具体的な巻・場面の詳細な〈読み〉の提示を伴った言説分類が試みられ、言説分析という方法の研鑽が目論まれている。一方、「第二部 源氏物語の認識論的分析」には「言説分析とは異なるが、カルチュラル・スタディーズ批判」「未来志向の論文」（四七七頁）として、「類似・源氏物語の認識論的断絶」の一章をあてる。

第一部の第一章と第十章では、言説の分類・区分に関する三谷の基本的な立場や方法についての集約的な説明がなされ、第五・六・八・十一・十二章で特定の巻を対象とした分析をさらに重ねる。それに対して、第二・三章は「新たな人物論」（二二頁）としての「実存分析」を、第四章は「重層的意味決定」という『源氏物語』の方法について、第七章は「境界空間」論を、第九章はイデオロギー論をそれぞれ展開する。これらの章において言説分析がいかなる位置を占めるかは把握しにくく、むしろ言説分析を必須の要件とする論述ではないようにも思われる。ただし、いず

れも「主体」の「散在化」という問題を扱う点において通底するという側面を持つ。その点で鍵となるのが第四章だろうか。

ところで、第一部の構成は基本的に分析対象とした巻の順に従っている。しかし、「あとがき」では「発表順位」に読むことを望む旨の発言を載せる。ならば、なぜかたくなに物語の展開に沿った配列にするのか。そこには、「意外にも」（本書の隠れたキーワードだ）物語の筋^{ストーリー}に「示すこと」に囚われた三谷の「思想」がかいま見えるのかもしれない。もちろん、これには教育的・啓蒙的な配慮もあるろう。「教育」は本書の大きな要素である。そもそも、テキストを「読む」ための方法的訓練、あるいは「職人的に使用する道具」（三二五頁）として言説分析を位置づける三谷にとって、自らその方法を練り上げつつ、いかに他の読者・研究者も使用可能な「武器」として提示できるか、つまり他者を教育・啓蒙できるかどうかは決定的な問題であるはずなのだ。ただし、本書で試みられている言説区分を「類型化して機械的に適応していくと、規範文法になってしまい、応用しか許さない、体系的なものに終息する危険」（四七六頁）があり、それは三谷が想定する教育的効果とは逆の事態となろう。だからこそ、「非体系」（七頁）を標榜し、多義的・多層的・多面的・多声的あるいは「混沌・重層・増殖・生成」（二頁）といったタームによって「源氏物語」というテキストそして「読み」を攪乱させることで、固定化しないよう読者に強く訴えるのだ。これほど「教育」的な側面を重視した「研究」書はめずらしく、貴重な存在である。

だが、それゆえにと言うべきか、ややうるさいとの印象も持

つ。例えば第二部では「反復」の認識論的問題が論じられているが、それと呼応するかのように本書には反復をおそれない説明・記述が目につく。はたして、それは「反復」権力^{パワースタイル}なのか、あるいはそれに叛く「反復」差異^{ディスタンス}なのか。第十一章ではそれまでの三谷自身による言説分類を再検討する必要性を唱えるなど、決して単純な反復ばかりではなく、さらなる「深化」（四七六頁）を見ることはできる。しかし、それもある一定の方向へ向かっているように考えられ（後述、結果として本書での反復が三谷の「読み」を権威化・権力化（「化」は三谷の好む言い方だ）する効果をもたらしているという面はないだろうか。

夕顔巻の「心あてに」歌をめぐる複数の解釈（二三三～三五頁）や、同じく夕顔巻のもののけの正体を「六条わたりの女」付きの「中将の君」とみる説（二四二頁）、あるいは夕霧が落葉宮に執着する理由の分析（二〇六～八頁、雲居雁に向けられた「鬼」という批判の読解（二二九頁）、さらに薫の「思想」と「幻想」をめぐる論述（第九章）や女性の立ち姿に魅惑されない薫への注目（三六二～三頁）など、本書には数え切れないほどの新たな、そして刺激的な「読み」が貪欲なまでに提示され、目を見開かされることが多い。文字どおり「啓蒙」の書、いやむしろ「眩暈」の書とさえ評すべきか。だが、それに比例してさまざまな疑問も浮上する。ここでは一点、「読み」の「重層的意味決定」について触れる。三谷は、「重層・多層的な意味決定性こそが、源氏物語の方法であり、源氏物語の批評や研究が、永続的に問わなくてはならない、目標であり、課題なのである」（二五二頁）と明言する。問

題は、重層的意味決定とはどのような事態を意味しているかということである。「重層的意味決定＝意味決定不可能性」(四五頁)ともあるように、文脈の射程の取り方や視点の置き方、あるいは言説区分の仕方などによって「さまざまな解釈」「さまざまな意味付け」(二三八頁)がなされ、したがって一義的に「読み」を決定しえないようなテキストのあり方を指して、三谷は「重層的意味決定」と呼んでいる。そして、実際に本書で示されているのは、複数の「読み」(の可能性)の羅列なのであるが(二四八頁、一七九頁、二二二―三頁など)、しかしこの用語が示唆するのは、複数・複層の要因(読み)がテキストの意味を決定しようとする際に「重層」する、その重層の仕方、言い換えれば複数の「読み」の節合や交渉の仕方への注目であろう。「読み」にも「さまざまな」レベルがあろうし、「読み」の間にも力学が存在する。一方で、「二項対立」(二一八頁、三四一頁など)ということばを対等な価値を持つ二者の並列関係を意味するもの(だが、はたしてそうだろうか)として忌避し、優位／劣位という非対称性を見逃さない三谷であれば、複数の「読み」の非対称的な関係を見定めようとしてもよいはずである。「読み」はすべて対等に、しかも没干渉にあるのではなからう。それは、「幼稚すぎる」(二七頁)「虚しい」(三二頁)読みに対して、「本来の」(五九頁)「根源的な」(七九頁)「適切」(二七九頁)な読みを言挙げすることとは別の問題である。

あえて意地悪く評してみようか。さまざまな読みの可能性にあらかじめ唾をつけ、今後の研究の沃野を我がものとしよう、自分

自身を超越的に位置づけようとする欲望の書が本書だ。作中人物を無知の人と見、語り手や作家を掌中に収め、テキストを「読めていない」これまでの研究者や読者を劣位に置き、「誤読」を認めるようで認めず、自らの誤読は想定しえない(「誤読だとは言えないだろう」三〇一頁)、そうした三谷という「主体」が本書を通じて立ち上がる。これは、「源氏物語」という対象自体に語らせる策略と、あたかも自己が源氏物語という対象を支配しているという虚偽的な自負が、綱い交ぜになった緊張と、疲労する身体がなければ、この仕事はできなかったであろう(四七六―七頁)とあるとおり、三谷の(意図的かどうかは別として)戦略的なスタイルなのでもあろう。他にも、「意外にも」本書は三谷のモラル・欲望をとときに露骨に、ときに隠微に見せてくれる箇所が多い(二一三―四頁、一一五頁、一九六頁、一九八頁、二二五頁、二六九頁、三六三頁、三八〇頁、三九五頁、四六一頁など)。こうした、読者・研究者である自らの姿を(あえて、あるいは結果として)提示し、テキストを「読む」とはどのような行為なのか、読者・研究者という「主体」はいかにテキストと関わるのか、という問いを実践を通して投げかけてみせた本書の意義は大きいと言わねばなるまい。さて、本書の主眼は自由直接言説・自由間接言説の「発見」と内話文の「再評価」、そして同化・同一化という「狂気」の文学的意義の主張にある。「言説分析は、言説分類・区分を基盤にしているので、科学的で合理的な視点だと理解される側面がある」(一七五頁)と言うが、本書での具体的な分析を見ればそうした誤解は生じえない。(自由)直接言説と(自由)間接言説との区分

の困難さ（二七頁、三九七頁）、会話文と内話文との区分の曖昧さ（三七六頁）、草子地と内話文や自由間接言説との近接性、あるいは「分類・区分を裏切る言説」（三八四頁）の存在など、言説区分が客観的な作業としては不可能で、〈読み〉と密接に関連し、文脈把握の仕方によって異なった言説に変化するようなものであることを本書は強調しているのだ。その中で、〈読み〉が言説区分を説明することもあれば、言説区分によって〈読み〉が開拓されることもある。やや融通無碍で恣意的との印象も受けるが、〈読み〉と言説区分との相互補完的なありようは本書中に繰り返し提示されている。なお、区分が困難であったり曖昧であったりすることをもって、区分すること自体を無意味であるかのように捉えるべきではない。そうした困難さ、曖昧さは区分することによって浮上してきたのであって、その逆ではない。

本書の成否は、何よりも自由直接言説と自由間接言説の区分の意義をどれほど説得力を持って論述できているにかかっている。自由直接言説は形式的には敬語不在（の短文）で、登場人物と語り手と読者とが一体化・同化するところに特徴がある。一方、自由間接言説は敬語と付加節の不在が特性で、それらを付けると内話文として解釈でき、そこには語り手の声と登場人物の声が多声的に響いているという。ただし、第十一章では自由間接言説を自由直接言説として扱っている例も挙げられており、両者の差異は微妙なところがある。また、その認定に際して、例えば比較的軽い敬語を敬語不在と同様に扱う（六一頁、七八頁、一六八頁、二五四頁、三七九頁）など、無理があったり十分な説明がなかった

りすることもある（三八七頁あたりは「直接」と「間接」とが混同・混乱しているか）。

だが、むしろ問題とすべきは、両者の最も重要な差異であるはずの「語り手の声」の響きをどれほど聴き取っているかである。自由直接言説は「同化的言説」（五六頁）であり、「語り手の視座はなく」（二六六頁）、登場人物＝語り手（読者）となるのに対して、自由間接言説は登場人物の一人称現在の声と語り手の三人称過去の声の両方を受容し、同化と対象化（中心化と脱中心化）という二面を有する。つまり、登場人物とは異なる語り手の声をいかに（どの程度）聴き取るかが両者の差異を決定づけるはずなのである。ところが、両者を区別しつつも実際の分析では「自由間接言説では、二つの声が別の音調で響いているのだが、重視すべきは、一人称／現在の登場人物の声である」（一九三頁）、「自由間接言説は」「内話文と同様な機能を果たしている」（四二四頁）というように、一人称視点を強調する傾向が全体的にある。その結果、「自由間接言説には、語り手の声も聞かえるが、薫の一人称視点で描かれている。自由直接言説も、薫の一人称視点であることは、言うまでもないことだろう」（三六一頁）といった叙述に明らかのように、「直接」と「間接」との差異が見えにくくなっている。

一見、三谷の分析はこれまで以上に語り手の姿・声をあらゆる言説（直接言説の会話文や手紙・和歌は今のところ除外）に読み取ろうとしているが、実態は異なるのではないか。つまり、本書は結果的に「一人称の声の発見」という地点に収斂し、「直接」か「間

接」かは決定的ではないように思われるのだ。そして、実体的な語り手を想定する方向（従来から三谷が繰り返し主張してきた立場であるが、いりほがな実体化と思われる場合や、どのレベルまで実体化するのか疑問を感じる場合もあり、あるいは「語り手は、二人の内面さえ理解できる女房として設定されている」（二三四頁）というように実体化不可能な語り手についての指摘もある）は自ずから語り手を登場人物の一人に位置づけることになるが、それと連動しつつ、三谷の議論は「人物論」へと向かっているのではないか。そうだとすれば、本書に実存分析が収められていることの意味も理解しやすい。こうした傾向を押し進めると、「語ることを（示すことに）還元し、（示すこと）の肥大化をもたらすのではないかと」の危惧を抱く。それは、三谷の目論む物語学とは正反対の動きである。本書の構成とも関係する問題であろう。既に「源氏物語の犯し」（二二二頁）、「過差の文学、文学の過差」（二〇五頁）、「物語学事始—古典

新刊紹介

窪田章一郎著

『樹下雑筆』

稀有な距離感を持った父子であった。

ある日、父は問う。「親は邪魔ではないか。」子は返事ができなかった。後に子は父と同じ道を選び、問う。「後からついて

文学入門—」（四三九頁）といった企画も予告されているが、今後の三谷「物語学」の展開・動向を見逃さないようにしたい。

その他、実存分析や認識論的分析、あるいは「源氏中心主義という非難を甘受しつつ」（四七七頁）も示される『源氏物語』評価などについても触れるべきであったが、紙幅も尽きた。ただ、常に果敢に新たな領域へと挑み、豊饒な成果と大切な問題提起を私たちに届けてくれる三谷の研究・教育実践が、一層着実かつ大胆に展開していくであろうことを予感させる内容が、そこにあることを指摘しておく。

本書は、言説分析の有効性・必要性・可能性と課題とを存分に物語っている。それが仮に三谷の期待・希望とは異なる意味合いにおいてだとしても、である。

（二〇〇二年五月 翰林書房 A5判 四九三頁 九〇〇〇円）

くるのは迷惑ではないか。」言下に否定された。

「短歌一首一首をならべるよう」に書かれた「雑筆」は歌誌「まひる野」の紙上に

十六年間一六八回にわたり連載され、二〇〇一年四月著者逝去の後、その一年祭に際

して公刊された。父空穂や短歌のことから旅や日常に至るまで淡い水彩画のような文

あがるのは著者と、著者の見つめる対象との独特な距離感だ。

多くの人々と出会い、影響を受けながら、彼がまぎれもなく彼自身として存在しえたのは父に対した時のような距離感を保ちえたからではないだろうか。

（二〇〇二年八月 短歌新聞社 B5判 四三三頁 三五〇〇円）

〔江村晴子〕